

## 平成18年をふりかえって

4階東病棟看護科長 田中 直子

平成18年の4階東病棟を振り返ると、1月から3月までは消化器内科と眼科の混合病棟であったが、4月からは消化器内科単科の病棟になった事が大きな変化であった。

平成18年は、ベッド稼働率91%を越え、入院患者様には急きょ病棟移動という事態になり、昨年同様ベッド運用の難しさを痛感した年であった。

また、少子高齢化社会の現在、当病棟に入院される患者様の年齢も高齢化し、一度入院をされると、ご自宅に帰れず退院後の行き先の調整を必要とする患者様が増えた状況であった。

このような病棟において、「患者様・ご家族の希望を取り入れた看護を提供する」事を目標にして、看護サービスの充実と、スタッフの能力向上を目指し活動してきました。

### 平成18年病棟看護目標評価

#### 1. 患者様・ご家族の希望を取り入れた個別性のある看護計画を実践する

先述したように高齢化に伴い、入院期間が長期化される患者様が増える中で、治療の経過においても長期化する患者様が増えた。

Aチームにはそのような患者様が多い。当病棟を退院するにあたり、退院後の生活について、不安を感じている患者様やご家族が多く、患者様・ご家族を交えてカンファレンスを行ない患者様やご家族の希望を取り入れた看護を提供しようと取り組みました。面会に来られる時間帯でのカンファレンスは頻回に持てない状況ではあったが、ご家族の不安や心配事を出し合うことで看護目標が明確になり、より良い看護の提供ができた。

しかし、一部の患者様に対しての試みであったために、今後は病棟全体でご家族交えたカンファレンスができるような体制作りを検討したい。

#### 2. クリニカルパスの追加・見直し・バリエーションの分析評価

消化器内科におけるクリニカルパスは現在少ない。今年は検査や治療に対するクリニカルパスを追加しようと目標に掲げた。

短期入院にて行なわれている検査や治療に関して、新たにクリニカルパスを作成し現在使用している段階である。まだバリエーションの分析評価には至っていない。

クリニカルパス作成段階において、医師によっては薬剤の使用方法が異なる事があり、作成に時間を費やした。安全な医療・看護を提供するためにも医師と協力し、数多くのクリニカルパスを作成する必要がある。

#### 3. 家族が入院していると思い看護にあたる

接遇に関しては、「思いやりを持って看護にあたる」ことを念頭に日々看護を提供しました。入院患者様一人一人が自分の家族であったらどのような接してもらいたいと思うことで、接遇には気をつけることができた。しかし業務多忙になると、思いやりに欠けたことが多々あった。

今後は、患者様やご家族が不快と感じないように接したいと思います。

#### 4. 一回は院外研修に参加して自己研鑽する

平成18年は、スタッフ全員が看護協会主催の研修会や出版者主催の研修会等に自主的に参加しました。昨年は参加率80%でしたが、スタッフが専門職として知識の向上を目指した結果である。今後も自己研鑽できるように支援していく必要がある。

平成18年も、看護係長とスタッフの協力の基、病棟を運営することができました。

今後も、患者さまやご家族に質の高い看護を提供できるように努力したいと思います。